

会報

[広報誌のインデックスへ戻る](#)

創刊号

1992年12月1日

発行 埼玉県大学・短期大学図書館連絡協議会
編集 東京国際大学図書館
聖学院大学総合図書館
明の星女子短期大学図書館



会報の発刊にあたり

代表幹事館
城西大学水田記念図書館館長
石川 澄雄

埼玉県大学・短期大学図書館連絡協議会「会報」の創刊にあたり、代表幹事館としてご挨拶申し上げます。図書館は申すまでもなく、大学にとって最も重要な機関であり、賢哲の思想、科学の最先端の研究に接することができることもに思案の場でもある。この図書館が社会の変革とともに、図書資料の増加、とくに学術印刷物の劇的に増えている今日、予算面、収集・収蔵面、あるいは、機械化などで多くの問題をかかえていることはご承知の通りである。

予算面では、国立大学財政基盤調査会の調査の例をとって見ると、国立大学(98校)の図書購入費は、一大学平均約1億円である。この額をもってしても現在発行されている図書の8割は賄えない状態であるといわれている。また、収蔵面では毎年1万冊の購入によって収容面積は約70m²の増設を必要とする。いろいろな制約の中でこの増設に如何に対処すべきか、また、機械化によって従来の図書サービス、管理が急速な変化に迫られているなど表面的な例である。これらの問題を抱えながらも、研究、学習に必要な図書資料を購入収蔵しなければならない。現実、また将来的にも解決しなければならない多くの問題がある。このときにあたって埼玉県大学・短期大学の各図書館の横の連絡をとって二十一世紀にむかって図書館の目指すべき方向、また、相互協力の有り方について検討する協議会をもっては時宜を得たものである。この協議会は昭和63年5月県内の大学・短期大35校の参加をもって発足して以来現在まで総会、実務者会を開催し、会を重ねるごとに充実し多くの成果が得られている。情報伝達がINS(Information Network System)のようなニューメディアへと移行しつつある今日、各図書館のより広範な相互協力により、各図書館の機能を高めうることであれば新しい時代に対応できるものと信ずる。終りに、この「会報」がお知らせのみならず皆様の意見の場として活用されるならば発刊の意味もあり「会報」の果たす役割も大きなものがあると思います。

図書館と電子化

前代表幹事館
埼玉大学附属図書館館長
土肥 泰

県内の大学・短期大学図書館の関係者が、長い間その発刊を望んで来た連絡協議会の「会報」が、この度めでたく創刊されることになりました。刊行のための準備にたずさわって下さった多くの方が、特に東京国際大学をはじめとする幹事館関係者皆様がたのご努力に対して、心から感謝の意を表したいと思えます。またこのような新しい節目を迎えた協議会の歴史にとっても、大きなステップとなるわけで、この意味でもたいへんおめでたいことと存じます。そしてこれからの加盟図書館の、ますます充実した活動の展開を期待致したいと思っております。

さて吾々図書館関係者の周囲で昨今とみに大きくクローズアップされて来ている問題として、図書館の電子化があります。もちろんこれは今に始まったことではなく、以前より徐々に進行していた改革と云えましょう。きわめて多様化した膨大な情報の収集・管理と、それらを研究者に利用してもらう過程で、電子化と云う当然取り組みまねばならない、現代社会の流れに即した機構改革が、大がかりに図書館自体を変化させようとしています。これは長い図書館の歴史にとって当然の帰結と云うべき現象でしょう。これは図書館の業務を効率的に迅速化する大きな

メリットを持っており、同時に業務に携わる方がたにとって、或る種の利便性ともなりましょう。このこと自体は決して否定するようなことではありません。むしろ積極的に取り込んで、利便性と共存すべきでしょう。しかし吾々現代人は余りにもこのような生活の中の利便性を追求し過ぎているのではないのでしょうか。1の仕事をして2も3もの効果をあげる生活の経済性は、現代社会における生活には欠かすことは出来ないものかも知れません。しかし無駄を省いた経済性への飽くなき追求は、ともすれば無機質な味気ない様相を呈することになるでしょう。コンピューターの画面に接している時、人と会話しているような触れ合いを感じることではないでしょう。たしかにコンピューターで他人と交信することは出来るし、そこになにかの会話を感じずるかも知れません。オンラインでのやりとりにも無機的で事務的なやりとり以上のものはありません。電話は相手の肉声に接する喜びがありますが、ファックスではそれすらなく、1枚の紙切れに活字が散りばめられたものが出て来るだけです。

このように現代の利便性と電子化と云う問題は、一見現代的な媒体に基づく現代的な操作がその根本にあるために、吾々にとって或る種の魅力さえ感じます。しかし、これは現代社会が持つひとつの陥穽であって、吾々図書館業務に携わる者にとっては、電子化の波を受け入れると同時に、業務中での人間的な人と人の触れ合いが大きな意味を持つのではないのでしょうか。図書館に集まって来る情報のひとつひとつが、文学・哲学・芸術・科学等々如何に人間的な内容で美しく彩られているかお解りいただけると思います。

《特別寄稿》

苦勞のない苦勞話 —協議会のうまれるころ—

前文教大学越谷図書館館長補佐
松田 上雄

会報を創刊されるとのこと、まずは心からお喜びを申しあげなければなりません。協議会も、はや5期目、基礎づくりの時も過ぎたようです。編集担当の方から発足のころの苦勞話を、とのご依頼でしたが、なにぶんにも当時の資料は私の手元にはなく、加えて生来の健忘症が歳とともに進む今日此頃のこと、記憶も薄れてとても正確は期しがたく、ただ想い起こすままにということになりました。

記憶が薄れていく理由の一つは、たぶん発足までに苦勞話という程のことが無かったからではないかと思うのです。もっともそれは私だけだったかも知れません。一番苦勞されたのは最初にお膳立てをした芝浦工大の山本さんであつたらうと思います。埼玉大の小野崎さん、城西大の戸田さんの三人が準備を始め、私などは半年ほどおかれて世話人の一人に加わったのでした。山本さんが東京に転出になり抜かれたのは残念でしたが、国立大という私大にはわかりにくい難しさのある中で、終始細かい世話をやいて下さった小野崎さん、大らかでいつも前向きに会合をリードしまとめ役となった戸田さんのお二人の存在は欠かせないものでした。さほど苦勞もなく話が進んだ(と私が感じた)のは、おそらく世話人会のチームワークのゆえでしょう。

苦勞の少なかったもう一つの理由は、世話人会のよびかけに殆どの大学、短大が一致して応えて下さったことでしょう。神経を使ったといえ、それぞれの図書館が学内で理解を得られるようにと、多少の気くばりをしたということかも知れません。首都圏にありながら神奈川、千葉にくらべ後進地域といわれるダ埼玉で、新興の大学、短大が多いことが逆に地域的連帯を容易にしたのでしょうか。発足までは比較的容易でしたが、これからが大変だと思います。実績をあげ、縁りを生むことの方がむづかしいからです。発展を祈ります。

活動報告(発足～今年度)

これまでの足跡

城西大学水田記念図書館事務長
戸田 猛

確か、'87年5月中旬だった。芝浦工業大学図書館印を押した文面の「埼玉大学図書館連絡協議会(仮称)準備会」の案内が私のところに届いた。

実は、その何ヶ月か前に、うちの若生館員より「芝浦工大の山本さんが是非、埼玉県に所在する大学の相互協力協議会をつくりたいので城西大も参加してくれ！」と言うことを何かの研修会で会った時に言われたとの報告を受けていた。

城西大学図書館でも、'85年よりそのような構想を館内打合せで話し合っていたので、ご案内の5月27日(水)には4名で集合場所である浦和市立図書館に出向いた。

それからの準備会で、埼玉県内の大学・短期大学の所在によって、県内をブロック化した方がよいのか、位置付けを日本図書館協会大学部会の埼玉支部にするとか、事業の主力になるだろう相互協力面はどの範囲にするのか等々多面にわたり検討した。

特に、5月27日には前東京理科大学事務長の黒沢正彦氏をオブザーバーとしてお招きし、他県の協議会に詳しいということでお話をいただいた。現在、記憶を辿ってみるとかなり本音を出し合っただけで突っ込んで論議したことが昨日のように思い出されてくる。

準備会をつくり、大学を集め、設立という目的に向かって走るということは、口では誰でも言える。しかし、それには芝浦工大の山本氏、文教大の松田氏、埼玉大の小野崎氏などのように図書館全般に愛情があり、なかには熱心さのあまり自館の組織さえも無視してしまうほどのものがなければ、この協議会の誕生はかなり遅れたものと思う。机に座って、これはダメ、あれはしてもムダ等理屈だけの者では物事の進展はおぼつかない。このような図書館人が今まで多過ぎた。

他県がやっているから自分達の県もということも大切だし、他県ではまだ手をつけていないから自分達の県で行いたいという発想と勇氣はまた重要な志である。これが将来、広範囲ネットワークとしての総合情報センターの役割を果たすことになるものと思う。

そしてやっと設立準備会を'88年3月10日(木)に県立浦和図書館で開催することができた。今でも幹事館同志で話題になることは、当日参加館が思ったよりも多く、26館32名の参加者だった。

その年の5月19日(木)に設立総会が、城西大学水田記念図書館において、日本図書館協会・専務理事の多田氏、協会の井上氏をお招きして無事終了したが、その際に会則、事業計画、幹事館の選出などの承認を得た。

協議会設立後の状況を見ると、短い期間のこともあり、幹事館の努力にもかかわらず未熟な視点をまめがれないが、これも段々と幹事館や人が変わっていけば、広い視野が出てくるものと思う。ただ、「共通閲覧証」の発行、実務担当者研修会の3回実施、今回の「会報」の創刊など、自館の多忙のところをよく協力し合っただけで実行していると自負している昨今である。これからは是非、加盟館の色々な業務の方々が参加してほしいと願っている。人間同志が会って、話をして、テーマを出し合い探求し、その一部を実務に生かすことは楽しみであると共に、人間の出会いの中で、個人レベルの生き方にも影響させていけば、それはすばらしいことだと思う。

総会あれこれ

— 第5回総会を終えて —

埼玉大学附属図書館
小野崎 好夫

第5回総会は、埼玉大学附属図書館館長土肥泰の挨拶から始まった。その内容は、近年の大学・短大図書館周辺をめぐるしい変化とその整備充実について説明が行なわれた。おりしも当地区総会終了間もなく、第13回学術審議会は、図書館に関して学術情報の量的増大、質的多様化に対応するための機能を十二分に果たすよう学内体制から学外体制(国内体制というべきか)の整備充実を基本的課題とした答申(平成4年7月23日)があった。その要旨は、最近のコミュニケーション技術の進展は、学術研究活動における情報ネットワークを第一とし、広域で高度な学術研究活動を促進させ、学術研究情報ネットワークの連携を図り、情報提供の中核としての図書館間協力を強く促して、図書館機能の強化の必要性を求めたものである。当協議会もここに5年の歳月を経たことになる。本総会が城西大学水田記念図書館で誕生の声をあげた頃、小生は図書館の相互協力がどの程度定着するかと疑問視していた一人かも知れない。しかし、総会の都度、小さな花の芽が大きく膨らんで来ていることに気付きはじめた。それは、加盟校が文献複写を始めとした相互協力活動から波動的な効果をあげていることもある。実務担当者会議も「熱気」に溢れ時間が短すぎるという意見すらある。加盟校は、それぞれの図書館で多くの問題をかかえながらも、前述のような答申に対し、少しでも近づくよう日夜努力していると思われる。当協議会も図書館の組織・規模等を問わず、地域間からの発展を考えた当初より大きな命題を生み出し、図書館の終局の目的は同一である。

発足以来5年を経過して「埼玉県大学・短期大学図書館連絡協議会」も当初の目的実現のため着実にその地歩を固めている。しかし、まだ基礎的な段階であり今後の実質的な発展が「何」を期待されているのかということを考えなければと思われる。それにはまず慣性を破らなければならないことであろう。当協議会加盟校には驚くべき若いエネルギーが溢れている。新しい伝統をこのような環境のなかから見直している図書館があると聞く。加盟校が機能ある図書館像を確立するため着実に「歩」を進めたいと考えると共に当協議会への御協力を願いたい。

活動暦

1992年10月末現在

1987年

3 芝浦工業大学図書館山本二郎氏、埼玉大学図書館長塚誠氏、前東京理
月11 科大学図書館黒沢正彦氏の三者で設立準備会の下相談をする。
日

5 第1回設立準備会 於：浦和市立図書館
月27
日

10 第2回設立準備会 於：埼玉大学図書館
月22
日

12 第3回設立準備会 於：県立浦和図書館
月3
日

1988年

1 第4回設立準備会 於：県立浦和図書館
月14
日

3 設立準備総会 於：県立浦和図書館
月10
日

5 設立総会 於：城西大学水田記念図書館
月19 出席：40名
日 司会：聖学院大学上沢田浩氏
議長：東京国際大学塩沢博男氏

1989年

2 「相互協力便覧1989」発行
月28
日

5 第2回総会 於：東洋大学朝霞分館
月19 出席：35名
日 司会：東洋大学池田勉氏
議長：城西大学戸田猛氏

10 「加盟館アンケート」実施
月3
日

12 第1回実務担当者研修会 於：城西大学
月6 出席：35名
日 テーマ：相互利用について
司会：城西大学戸田猛氏
議長：淑徳短期大学鎌倉敬文氏

1990年

6 第3回総会 於：東京国際大学第2C
月7 出席：32名
日 司会：東京国際大学中西泰幸氏
議長：淑徳短期大学鎌倉敬文氏

10 相互利用制度（共通閲覧証）発足
月1
日

12 第2回実務担当者研修会 於：文教大学越谷図書館
月12 出席：34名
日 テーマ：オリエンテーション・文献ガイダンスをめぐって
司会：文教大学花房良三氏
議長：東京国際大学田口稔氏
事例発表：埼玉大学永井康友氏
獨協大学佐々木俊治氏
聖学院大学市来陽子氏

1991年

7 第4回総会 於:獨協大学
 月19 出席:35名
 日 司会:獨協大学永井純一氏
 議長:東京国際大学田口稔氏

12 第3回実務担当者研修会 於:城西大学
 月9 出席:36名
 日 テーマ:外国雑誌をめぐる諸問題
 司会:城西大学戸田猛氏
 議長:埼玉大学小野崎好夫氏
 駿河台大学柿沼正男氏
 雑誌システム概要説明:紀伊国屋書店湊雑誌部長
 丸善齋藤外国雑誌課長

1992年

5 第5回総会 於:埼玉大学
 月26 出席:36名
 日 司会:東京国際大学田口稔氏
 議長:城西大学戸田猛氏

なお、幹事会は設立総会后、第1回を1988年7月21日に行い、本年10月9日まで
 に、会場を幹事館持ちまわりを主とし、通算25回開催した。

(城西大学 戸田猛、東京国際大学 田口稔)

加盟館紹介(1)

当会には現在、大学23館、短大14館(大学との共用除く)が加盟。各館の分野
 は文系、理系、医系、芸術系、体育系と多岐。所在地もいわゆるコアエリア的
 集中はなく、県内に分散分布。ゆえに、推察すれば、各館はそれぞれ特色ある分
 野の充実とスタンディングアローンの運営のジレンマの中、日々健闘。加盟館に
 よる『自館紹介』で、その奮闘ぶりをご披露いただきます。今後、シリーズ扱いと
 なりますが、順不同はご容赦ください。

埼玉短期大学図書館 ーわが図書館の現状ー

図書館長
 柏村 静子

埼玉短期大学は、平成元年に創立された新設大学なので、図書館の歴史はわ
 ずか三年という誠に浅いものである。現在蔵書二万冊余を数えているが、今
 の段階で基礎固めをしておかなければならないと腐心している。館員は館長を除
 いて三名、このうち司書は一名である。現在の大きな課題は、何時、如何なる形
 で機械化できるかということである。図書館の機械化は時代の趨勢であるが、機
 械化に伴う諸問題解決の目途はまだ立っていないのが実情である。その為現在館
 員の業務は手作業による蔵書整理に終始している。一応カード整理は終了して
 いるが、寄贈書について未整理分が残っている。学生の利用状況は、多い日は
 三百名を数えることができるが、平均して二百名というところであろうか。図書
 館内にCD・ビデオ・テープの視聴器それにコピー機が置かれており、すべてワン
 フローなので、騒音に気を遣わなければならない。図書等は消耗品とはいえ公
 共のものであるから大切に扱われなければならない。図書館員が忙殺されるの
 は専ら管理的な面になる。図書館情報を年二回発行しているが、これは図書委
 員の仕事として教師・館員一体となってやっている。まだまだ図書館の大学にお
 ける重要性が確立してはいない。学生に対する図書館のサービスは如何にあら
 ねばならないかを深く考えなければならない。講義に寄与する図書館のあり方も
 追求されなければならない。問題は山積している。よい大学にはよい図書館があ
 るとしみじみ思う。

立正大学熊谷図書館の紹介

閲覧奉仕課長
 瀧 義隆

立正大学熊谷図書館は、昭和54年7月31日に竣工した地下1階、地上3階の建
 物で、約17万冊を所蔵致しております。熊谷キャンパスには、全学部の1・2年生

及び法学部の3・4年生と、短大生が在籍しておりますので、蔵書の種類は教養課程に相応しいものを中心に、幅広い分野に渡っていますが、特に、法学部関係及び短大の3学科(幼児・商経・社福)関係の資料収集には力点を置いております。大崎校舎(東京・五反田)の本館は歴史も古く、仏教・歴史・地理等の貴重な資料を多数所蔵致しており、専門課程の学生や大学院生への利用に供しております。

熊谷図書館の1日平均の利用者は、授業開講日には千二百名もの学生が来館しております。利用者の中、CD・VHS等のオーディオビジュアル関係の資料を利用する学生が年々増大して来ているのも、時代の趨勢と思われる。また、熊谷図書館のユニークなものとして、「ブックリサイクルコーナー」があります。これは、学生・教職員から不要となった図書を提供してもらい、ブラウジングルームの一角に「ブックリサイクルコーナー」として書架を設置し配架しておりますが、一般の図書資料の利用形態を取らず全く自由に利用出来る為か、学生の利用率も高く好評となっております。この外にも、紙資源の再利用を目的とした、コピーミスマス用紙を集める「グリーンボックス」も設けております。

大東文化大学60周年記念図書館

課長補佐
吉江 一徳

東松山校舎図書館は、開学創立60周年を記念して建設されている。ほぼ時期を同じくして国際関係学部も申請、認可された。新学部の設立に合わせて新校舎群が造成される。

旧校舎群と新校舎群は、オーバブリッジによって直結されており遠回りすることなく往来できる。

オーバブリッジの中間に図書館は位置する。従って、教員、学生共に授業に行く前、昼休み、放課後等において、いつでも、気軽に立ち寄れる。

地上4階、地下2階、独立した建物で、建築面積1749.42m² 総面積8,916.38m² 1階から4階は全面開架で、カバンを持ったまま入館でき、書架から本を自由に手に取って閲覧できる。地下1階、2階は、1階メインカウンターで手続きの上で入庫できる。その際、カバン、コート類は預けて入庫する。入退館の管理はBSDで行っている。

座席数は、1階から4階で約700席ある。開架図書数は、約13万冊。地下の閉架書庫で凡そ45万冊から70万冊の収容冊数をもっている。

その他に、特に2階自習室を設け、日・祭日以外に自由に使用できるようにしている。

図書館の特色は、和書一般(中国書、韓国書を除く)は大半、開架室に出ていることである。但し、将来において、逆転することもありうるが、中国書や韓国書、洋書は総て地下書庫に収納している。

設立時に国際関係学部を申請、認可されたのに伴い、アジア関係の関連図書、雑誌、視聴覚資料の収集に努めていることである。

図書に関してはアラビア語、ヒンディ語、ウルディ語等々の特殊言語図書は収蔵しているが、まとめて収集しているところは関東地域では、少ないといえる。

新聞、雑誌においては、中国時報、南洋商報、DAWN(パキスタン)、Inquirer(フィリピン)Financial Times、Times of India(インド)等々のアジア各地の新聞資料がある。

News Week(日本版、英語版) Business Week、The Economist 等や、アジア地域の雑誌、専門誌を収集している。

本学にはアジア各地より留学生が500名きている。特に中国を中心として、マレーシア、タイ、あるいはトンガなどの国から学びにきている。中国系の新聞を中心として、留学生によりよく利用されている。さらに衛星放送をとり入れることで生の情報もいつでも、すみやかに知ることができる。

本学図書館はこうした特色を生かしながら、次の世紀に向けてより充実した内容を備えるべく努めている。

シリーズ随想

人的・物的交流

明海大学歯学部図書館課長
高野 恭一

編集委員から、埼玉大学での会合の後、飲みながら創刊号の原稿依頼を受けた。テーマは後で連絡するという事で引き受けたが、人的・物的交流に関する事である。

さて、昨今、相互協力の必要性が盛んに言われている。今日、ひとつの大学で必要な資料を全てまかなうのは不可能である。他の大学図書館と協力して不足

分をカバーし、利用者の要求に答えていく時代と言える。全国的には学術情報センターを中心としたネットワークシステムであり、身近には、この共通閲覧証による相互利用である。

現在行われている相互協力の大部分は雑誌を中心とした文献複写であり、自然科学系の図書館では特にその傾向が強い。この会のメンバーは文科系の大学が多く、単行書を中心とした利用形態であると思われる。そこでひとつの提案であるが、現在行われている閲覧利用から、一步踏み込んで、単行書の貸出を行ってはどうか。共通貸出証の発行となると、話はややこしくなるので、様式、期間などは貸出館に一任し、とにかく借用ができるという事だけを取り決めてもよいと思う。当館では医学図書館協会に加盟し、単行書の現物貸借を行っているが、今までにトラブルはないし、受けるメリットの方がはるかに大きい。また、隣の城西大学とは関連する学部もあり、数年前から単行書、雑誌の現物貸借を行っている。利用者は便利に使っているようである。

ところで、単行書は雑誌と違い、所在の確認が大変である。学情システムに参加していれば容易であるが、そうでない館にとっては、見当をつけて個々の図書館に当たるしかない。その場合、担当者と面識があるのとないのでは、心理的にかなり違う。細かい問い合わせでは、なおさらである。この会でも実務担当者による研修会、と言うよりは顔つなぎの会を、これまで以上に企画したらよいと思う。そうすれば所在の確認だけでなく、日常業務のアドバイスや問題点のヒントが得られるかもしれない。

ただ、良いか悪いかは別として、昼間の研修会は建前の話を中心であり、本音の部分はなかなか伝わって来ない場合が多い。経験的には5時過ぎ、しかも二次会あたりの方が参考になる。それにしても、人の交流がスムーズに行けば、物の交流もけっこう、うまく行くものである。



加盟館名簿 ……省略



インフォメーション

- 過日のアンケート調査(「研究紀要取扱いについて」、「共通閲覧証利用状況について」)のご協力ありがとうございました。
- 加盟館におかれましては、『共通閲覧証』へのご理解と有効活用をよろしくお願い致します。
- 加盟館ないしは当会などに関連するニュース・情報、また、当会へのご意見・ご提案等がございましたら、ぜひ、最寄の幹事館までお知らせください。



編集後記

埼玉県大学・短期大学図書館連絡協議会『会報』創刊号をお届け致します。ご一読ください。

今年度総会で「発行計画案」が承認されて約半年どうにか計画を履行でき、ひと安心。それよりも、不明瞭な執筆依頼にもかかわらず、快くご寄稿いただきました執筆者の皆様に深謝申し上げます。

当会発足から5年、これまでの経緯・足跡、何とかまとめられないか、苦心しました。結果、窮屈な紙面となりましたことご容赦ください。何はともあれ、この『会報』が加盟館間の交流の一手段に、さらには、加盟館を超えた範囲で、当会の存在認知のきっかけとなれば担当者一同望外の喜びです。

今後とも、ご助言、ご協力の程よろしくお願い致します。

(東京国際大学 田口 稔)

[広報誌のインデックス](#)へ戻る

Last Update : 2000.05.31

webmaster@sala.gr.jp